

# 教区新報

第5号  
 発行 浄土真宗本願寺派  
 兵庫教区教務所  
 〒650 神戸市中央区下山手通8丁目  
 1番1号 本願寺神戸別院内  
 電話 (078) 341-5949

## 組画変更の今後の課題

昭和五十七年以来、三年間の慎重な準備の後、昭和六十年四月一日に新組画が発足して、早くも二年半がたった。このいわゆる教区あげての組画変更は、我が宗門の歴史の中でも画期的な出来ごとであり、他教区から多大の讃辞と羨望の眼差しが送られて来たことは記憶に新しい。しかし教区・組自体としては、まだ「克服すべき課題が少なくない」新たな問題も発生しているように思われる。新組画が本当の成果を挙げるために、今後どうすればよいか、僭越を顧みず、あえて一石を投げたいと思う。

新組画になった問題の一つは、たとえばA B二組が合併して一組になった場合、旧A Bはそれぞれ「前の考え方、習慣等から脱しきれず、そのため組内一致の協力態勢が確立されにくいことである。」  
 また、C組を中心として近隣のD E組から少数寺院が加って一組を作った場合、旧C組的方法論が殆どの場合に優先し、D Eより加った寺院の意見が反映しにくい場合があるとも聞いている。しかしながら、これらの問題は、今後、組内住職の一層の融和懇親によって、徐々にではあっても解消に向うものと期待される。

組画変更後の有無にかかわらず、基幹運動をはじめとする宗門の諸活動の停滞の原因となつては、何となく一部寺院の無関心主義、及至は非積極性（非協力）の問題である。「自分さえよければ」とか「自分には関係がない」などは、少くとも組織の中の一員として許されるべき態度ではない。連研等への住職の出席率が必ずしも良くない組も

少くはないようだが、ややもすれば連研のマナー化停滞化が指摘されている現在、その活性化の爲にも、是非とも全住職の積極性の喚起が望まれる。

連研不振の原因の一つに、講師となる住職の勉強不足が挙げられる。中には連研読本を読み流すだけで終ったり、話し合いの席で、研修者の質問を力づくで押さへようとする住職も居るそうである。これらは何れも、講師コンサルタントとしての自信の無さが為せる仕業ではないか。連研読本のどんな箇所でも自在に解説し、研修員の質問程度ならどんなことにも相談に乗れる実力を住職は蓄えておく必要がある。

なお、新組画以後、従前の寺院間の参り合等の形式を廃し、新たなつき合いを開始した寺院もあると聞いている。これはまことに喜ばしいことで、組画変更の大きな功績の一つであろう。今後、このような手近かなところから基幹運動が推進され、御法義が本當に繁昌することを、こい願うものである。

企画推進室 高崎長英

### ポスター標語募集

近畿同朋運動推進協議会では毎年標語ポスターを掲示伝道用に、各寺に配布しています。今年度は兵庫教区担当で、同朋運動推進の標語を広く募集します。奮ってお寄せ下さい。

- 一、標語 同朋運動推進に適したものを  
 二、採切 十一月二十日  
 三、提出先 神戸市中央区下山手通八丁目一  
 四、兵庫教区教務所内近同推事務局

## 御同朋の社会をめぐって⑤

出石組正福寺 山崎 一朗

「御院さん、今日は。」  
 「あら、もう大阪へ帰ったんやないん」  
 「へえ、そう思いましたけど兄貴が秋祭りも見ていけ言いまつさかいな。」  
 「そうや、もうお祭りやな。まあいいがな。久しぶりにゆつておいら心配なら。店の方は若い者にまかせておいたら心配ないやろ」  
 「そうもいさまへんけどな。ところで御院さん、この間の結婚の話な。」  
 「どないした」  
 「他人事とちがいますな、やつぱりありましたわ。」  
 「ほほう」  
 「兄貴の嫁はんの実家、知ってはりますわな、その長男ですがな。」  
 「知ってる。ええ子やで。」  
 「和男いいますんや。それが丁町の勤め先である娘さんと親しうなりましたんやで。」  
 「結構なことや」  
 「その娘さんも和男の家に遊びに来る、和男

も相手の家に行つてご飯よばれたりして親同志もよう知ってますのやで。」  
 「なるほどな。悪いけどな、そこから先は話してもらわんでも大体判るわ。その娘さんの親も男を見ていい人やと言つた。和男の家でもええ娘さんやという。そこで娘が切り出したか、和男が申し込んだか結婚となる、途端に一転して拒絶、猛反対というわけやろ。」  
 「そうすねん。嫁にはやれんて。一人娘でもないのになに言うてるんや。はつきり言わんで理由をはつきりしてますがな」  
 「そうや、きょうぶ部落やから嫁にやれまへん理由をならべたてたやろ。親戚が反対とかなんとか……」  
 「へえ、またその親戚に一人、強硬なのがいてるそうや、なんでもそんな娘は監禁してしまえとかなんとか、一体自分をどれほどの者と思つてるんやろ。」  
 「まあまあ、興奮したらあかんがな。それで

「肝腎の娘さんは？」  
 「絶対に結婚する、監禁なんかされへん家出する言うてますそうな。」  
 「ふうん、そうやろな。」  
 「それで向こうの親がすな、出した条件ちゆうのが嫁にはやれん 男の方がうちに養子に来ることにしてそちらの籍を抜いて欲しいということでしたそうや。しかしこれは娘の兄が反対だそうや。」  
 「きまつたことや、それになんを話して今まで何干、何万回とあつたパターンや。それで誰か仲に入つてゐるんかいな。」  
 「ええ、和男の家の遠縁でこの村の、あれ、あの人の寺の総代はんでつせ。」  
 「あああの人なら任せておいて安心な方や」  
 「ところでな御院さん、私や今度のこの話の中ですな、一番気に入らんことがありますのや。」  
 「なんやね。」  
 「その娘さんの家も、その親戚ちゆうのもみ

んな浄土真宗だそうでつせ。浄土真宗の門徒にこんなことがあつてええんですか。」  
 「ええはずないわな。」  
 「そうでつしやろ、それでしたら総代や仏婦や仏社やと同朋講座やつても効果上がつてないということになれまへんか。」  
 「そうやな、今度の場合からしても効果上がつてないと言われてもしやないな。だけど、だから止めてしまえというわけにはいかんのや。」  
 「そりやまあ……」  
 「あのな、私、思うんやけどな。たしかに同朋講座、同朋講座つてやってきましたわな。でも中身はなにかちゆうことになってきたわな。でやるちゆう姿勢や。あなたの心の中に差別心はありますか、それに気付いていないのではありませんか、要するに坊主が教師よ。そうや、今までこうしてあんな話してきてるわな。みてご覧よ、私はずっとあんなに教えるという姿勢ばかり取り続けてきてい

るわな。悲しい癖やで。」  
 「そうすな、私や御院さんちゆうもんは人におしえる立場、教えられますがな。」  
 「教える立場、教えられる立場、それが無うならんことには同朋講座にならんような気がするんやが、あなたが言う効果上がらんのもその辺に原因があるんやとちがうやろか。」  
 「そんなこと私に判りますか。その辺は御院さん方がよう反省されることにしつて、それにしてもえらい弱気にならりはりませんな。」  
 「そういうわけやないけど。ところで聞くがあなたな、子供のころのこと思い出すことないか？あのころは何吐かすと腹立てるだけやつたけど随分差別きつかったで。」  
 「そうすな。今思い出した腹煮えくりかえるようなことたんとおましたな。」  
 「そうよ、だから暴れまわる、暴れるから鼻つまみされる、そんなことの繰り返しやつたな。」  
 「ほんとにそうでしたな。」  
 「ところであの頃の過去帳にな、韓国のいやや今でいうと北鮮になるかな、そろつて五人同じ日に死んだことが記帳してあるんや、覚えてるやろ？」  
 「ええ、そんなことがおましたな。」  
 「学校で差別の目にさらされたいた我々はあの人たちをどんな目で見ていたやろ。この寺の門徒の人々が、自分達の地区に入つて同じように暮らしていたあの人達にどんな態度をとっていたのか、腹が煮え返つたのは我々だけであの人達はそうではなかつたのか、そんなことを思うんよ。」  
 「ええ」  
 「私は自分が差別されたことは、こうして何十年たつても忘れない、その自分が大変な差別者であつたことは奇麗さっぱり忘れ果てている、差別される者は容易に差別する者になり得るということがあるわな。ニューヨークでコロンビア大学の日本人学生何人かと話合つたとき彼らが言つてた「ここで黒人が日本人を差別しているわな」という言葉が今でも耳に残つてゐるわな。差別された自分がいつの間にか差別する自分であることを忘れていた、これは何も差別に寛容であれなんてことを言つてゐるんじやない。その反対なんだがな。」

# 門徒推進員コーナーの活動

第二十八期生として、昭和五十八年八月同志二十五名と共に四日間の中央研修の縁をいただいた、あの決意表明の感激から早や満四年が過ぎました。「家庭で在りては必ず出席し、研鑽の縁をいただいた大きな喜びでございます。又お寺の諸行事にもお手伝い等の縁に恵まれて私なりに生甲斐を味っている処でございます。残念ながら門徒推進員としての役割でなくして仏僧役員として活動している様に思いますが、弥陀の本願に生かされている私には何れでもよい様に感じています。先日の教区研修会に於いても、杉本先生よりご指摘されました門徒推進員としての共通の悩みは、推進員としての働きやすい環境づくりや役割の設定など各寺院住職と充分話し合えるように...」確かに、お寺に於ける報恩講や永代経などの行事は総代世話さんの役割分担です。又寄付金等を集めるのも、又然り、先輩高齢の総代役員さんをして、お寺の活動は常識的に許されません。時々刻々と変化の激しい今日の情報化社会に対応するには、過去のしきたりのみにとらわれず、新しい若い人材活動的な新人の発掘が必要だと思えます。行動力があり生き生きとしている新興宗教の姿に注目すべきだと思えます。いつも決った顔ぶればかりで若い人が集まらない。基幹運動計画も紙上の活字に終ることなく、行動であり実践でなくてはならないと思えます。各寺院で法事や、葬祭等の職業的な行事のみにとらわれていて、どうして教団教区の基幹運動をこなすことが出来るでしょう。私は「たてまえ」と「ほんね」が違いすぎる。決めた事は実行する。行動に移すことです。心豊かな日常生活を送るために基幹運動計画の完全実施は必要と思えます。きれいなごとはなく私もあなたもできる事からやるしかないと思えます。愛する教団発展のため子や孫に伝えるためにも頑張りなくてはならない。

九月二十七日、第六期第三回(六七回)「出石組連研」が長尊寺(玉岡美実副組長)で開かれた。但馬はいま稲刈りの最盛期。寺を通じて二度三度督促をしていたもの出席率については不安があった。八時半受付(会場寺の研修員)が開会までまどめたものによると、六十五名中九名欠席であった。やはり欠席が多い。(一回三名、二回四名欠席)。開催日の設定は一年前の組推進員会で行われていたのではあるが、やはり誤算として反省させなければならぬ。

事務局のある庫裏の座敷には、組内住職十名・坊守九名(出石組十九名)が集まり本日の打ち合わせや近畿仏壇大会のことなど話し合っていた。これは出石組連研のいちはん誇りでもよい点であろうか。昭和五十一年に連研を始めて以来この期まで一カ寺の漏れもなく「組連研」が続けられたのは、この住職寺族の積極的な協力とチームワークのよさであった。昭和六十年、出石日高が合併して新出石組が誕生してからこの態勢は維持することができた。組長はこまめに「組報」を出し相談員は「れんげん」(連研連絡紙)を正確に発行して寺院間の連携を図った。寺族婦人會も活発に研修の連携を盛り上げた。この住職寺族の日常の連携のうえに、今期連研も成り立っているのである。また、これまでの組連研から多くの寺に施設が整備されたこと、あるいは仏壇・仏具活動など寺院活動の活性化の要因のなかで今期の研修員も多く応募してきていると思われる。

九時開会。「正信偈」で勸行(善立寺住職)の開講の挨拶(長尊寺住職)「ここでは毎回、研修の目的を確認することになっている。続いて讃歌の練習。これは毎回本堂住職坊守が担当。エレクトーンの伴奏で今回は「さんだんのうた」「礼讃歌」であった。殊に礼讃歌一首一首についてのご法話を耳を傾けながら唱和した。次の講義は組長山崎一朗師と相談員西池とが交替で担当している。今回は「読本」に則って「仏教の経典」「七高僧」であった。身近な「お正信偈」をむしるテキストにして話した。一時間半。研

修員には随分つらい時間であろうが真剣に聴いた。昼までの四十分間勸行練習(福成寺住職)。今回から行譜に入った。この地方では行譜が日常勤行として定着しているのが、地方的な読み癖を訂正することに力点が置かれた。さて昼食。五日前日を締め切り日にして、出欠や弁当所要数が事務局(勝林寺)に集約されている。弁当は七百円。各寺坊守が代金の収納と弁当配布を受け持っている。「食前・食後のことば」は高福寺住職の発声であった。

出石組は第一期から全一日の連研をして、悪い。二回を一日にまとめて効率よくやるためである。講義も話し合いもまずまずまとまったものができる。この方式が出石組ではもはや動かさない。さて、午後からはまず作法(西方寺住職)の作法が実が一番身近で具体的な関心事である。今回の「お仏壇の壮厳」もなれば格別強い関心が動いていた。六班に分かれての話し合い「れんげん」です。すでに問題提起をしておいたつもりであったが、これが今回の大失敗。分散会に入る前に急遽問題提起のしなせがなされたりして研修員はおおおとどどど。こんな大変なミスがでる。どこかで、何らかの方法で、タガを締め直さなければ、六期にもなるこんな重大なところに「慣れのミス」が出る。猛省しなければ。

分散会では「浄土真宗であった有り難かつたこと」がおもに話し合われた。ご法話が聞ける。「真宗」組で年五回発行「全門徒に配布)や「寺報」などで迷信をたたきださる。忙しい中にも研修の機会が得られた喜び。ご利益を期待してはなくてもお念仏申せば安らぎが得られる。寺の法座の紹介をしてほしい等々。「まとめ」では相談員が、「三不信の法義によつて信心と心と」ところと信心の利益について法話して、「恩徳讃」唱和で閉会にした。

本願寺教団は、幕藩体制下にあつて封建制度の上に胡座をかくて微温湯につかつかつて来ました。私達は教団が、過去に於て部落差別を如何に把握、如何に対処して来たかを明確に学ばねばならないと思ひます。そのことは決して無駄ではないと思ひます。教団は、明治四年太政大臣の勸告を受け乍ら、明治、大正の長きに亘り、何等省みることなく過して来たことは皆の知る処であります。

教団は、水乎社の創立より遅れること二年、大正十三年に「親鸞聖人の教義に基き、専ら人類相愛の精神を普及し、社会の安寧と文化の向上を図る」を目的として、漸くこの一如会は「宗教的融和団体」として、天皇制政府の融和政策や、その融和運動の一翼を担って来たのであります。さて教団は敗戦後戦前の一如会の復興を目指したが果たせず、昭和二十五年に新しい組織として「浄土真宗本願寺派同朋会」

の設立をみたのであります。そして各教区に同朋会支部を設置することを定めたのであります。斯くして、近畿各教区に於ては、年次的には差がありますが同朋会支部が設置され種々な経緯を経て、昭和二十九年に「本会」は各教区に於ける同朋運動推進に必要なる連絡事項並に資料の交換及重要案件の処理に協力するを以て目的とする」として同朋会近畿教区連絡協議会(近連)が結成されたのであります。

近連では、その後会の目的を果たし乍ら全教同人と、教団組織に同問題と取り組むことこそが念仏者の生活実践であり、同朋教団確立の唯一の方法であるとし、同朋会の活動の最大の目標は同朋運動の「教団化」にあることを訴えて来ました。やがて、昭和四十六年に同朋運動本部が設置され、教団の外郭団体である同朋会によつて推進されていた同朋運動が教団の基幹的宗務(運動)として推し進められるこ

とになったのであります。この為同朋会は発展的に解散することになり、又、同朋運動本部が全教区に「教区同朋運動推進委員会」の設置を進めたことにより、同朋会支部の結集体であった「近連」も解散せざるを得なくなったのであります。然し近畿各教区は固く団結して教区同朋運動推進委員会を中心に近連を「同朋運動本部」と連携を保ち近畿に於ける同朋運動推進に必要な事項を協議し強力にこれを実践することを目的」とした「浄土真宗本願寺派近畿同朋運動推進連絡協議会(近同推)」に改めたのであります。こうして近連の活動と伝統を引き継ぎその活動を推し進め、昭和五十二年には会名を「近畿同朋運動推進協議会」と改め近連結成以来三十三年(昭和六十二年)の輝かしい歴史の上に現在に至つております。近連以来同朋運動の「教団化」を目標として教団に対し目標達成の為にあらゆる手段を以て働きかけて来ました。然しその活動は唯単に同朋運動の「教団

## 近同推について

浄土真宗本願寺派 近畿同朋運動推進協議会 会長 和田 智浄

化)をはかるためのものだけでなく、同和教育センターの建設「財団法人同和教育振興会」の設置等に大きな役割を果たしてまいりました。一方昭和四十六年より始めた婦人を対象としたブロック研修会は現在「近同推」の主催する「婦人研修会」として伝統が受けつがれております。又、文書活動としてシリーズ刊行「親鸞さまと歩む道」があります。その上昭和三十五年に同朋運動推進の為にポスターを制作した。その経緯は今日も「近同推」によつて生かされ毎年募集した標語を近畿各教区内の全寺院に配布されていることは周知の通りであります。こうして「近連」は敗戦後の教団の同朋運動を担い推進してきた「同朋会」の中核として活動し、その活動のいくつかが現在も尚「近同推」や基幹運動本部に継承されているのであります。

「まどめ」では相談員が、「三不信の法義によつて信心と心と」ところと信心の利益について法話して、「恩徳讃」唱和で閉会にした。

出石組相談員 西池哲俊

姫路中組安楽寺 木村 隆